



造物主

はじめに

古代ギリシアの哲学者プラトンは、著書『ティマイオス』において自身の考える宇宙の起源論を述べました。そこにプラトンは古典ギリシア語で「公共のために働く者」を意味する「デミウルゴス」という宇宙の造物主を創造しています。

デミウルゴスはアイデアを模倣し、この宇宙を造りました。アイデアとはプラトンの哲学の中核をなす概念で、常に存在する永遠不変のものであり、デミウルゴスが造った宇宙はあくまでもその模倣でしたが、彼は善き者だったため生成されたもののなかでも美しくなったのです。

グノーシス主義

プラトンから時代が下った紀元2世紀



プラトン

頃の地中海地方では、後にグノーシス主義と呼ばれる思想運動がおこりました。グノーシスとは「認識」を意味する古典ギリシア語ですが、彼らグノーシス主義

正当な潮流

磯崎のデミウルゴスについて、彼の言葉を借りながらも少し詳しく見ていきましょう。磯崎はまず自論を展開する前に、建築家ジョセフ・リクワートのデミウルゴスを引用しています。

「デミウルゴスは強力な能力を持つてはいるが、間違った設計図でさえ、もし神がこれを与えたなら、そのまんに彫り、造つてしまふ。ときには人間にとつての恐るべき敵にさえなりうるのだ、と私は解釈する。ミノス(クレタ)に迷宮を建造したダイダロスをみるといい。彼もまた建築家＝職人で、いかえればデミウルゴスの化身だったのだ。人間にとつては恐るべき存在で、殺害されなければならないほどの非人間的な行為も平気でなしてしまふ。私はこのデミウルゴスに賦与された超人間的な能力こそが、建築家のモデルたるべきで、これをアントロポモルフィスム(人体形象主義)に対してデミウルゴモルフィスム(造物主形象主義)と呼ぶことにした」(カッコ内は著者補足)



ダイダロスとミノスの迷宮

「職人(または建築家)の神としてのデミウルゴスが操作したのは、全宇宙的空間、場、またはすべての存在を助産するものとしての、コーラにおいてだった。賢明なる統治の社会的行為、あるいは職人の素材へかたちを刻みこむ行為の如何を問わず、プラトンはデミウルゴスのやりかたが、人間の正しい行為のモデルになると考えた。建築家が建物の構成素材を配列することも、このモデルの一部である。それが洗練されていくことは、ウィトルウィウスのいうように壮大な宇宙的ヴィジョンの喚起あるいは充足なのである。造物主は、みずから宇宙的秩序と遊びながら建築家に建築とたわむれるやりかたを教える」

者たちの思想は、宇宙全体を含む可視的世界の否定を根底とし、人体は魂の監獄であるという認識を持っているため、プラトンの唱えた造物主デミウルゴスについても、「悪の王国」を造った不完全で醜い存在にほかならないと真反対に考えたのでした。

グノーシス主義者たちのあるグループが考えた造物主デミウルゴスは、「天を知らずして天を作成した」自分だけがすべてであるという傲慢で無知蒙昧な存在であり、また他のグループらは造物主として「混沌の子」を意味するとされるヤルタバオートを創造しました。

ヤルタバオートは蛇とライオンの姿を呈し、目は火のような光を放っていました。おそらくライオンは傲慢を、蛇は狡猾さを、火のような目の光は欲望を表しているのでしょう。

建築家とデミウルゴス

そのような紆余曲折を経て、宇宙の造物主「デミウルゴス」は、ルネサンス期の

変遷の20世紀における行きつく涯です。磯崎はその像を大きく変節させるのです。

神でもなく人でもない形象

磯崎はフィチーノの言に対し「デミウルゴスの役割はそのとおりだが」と前置きしたうえで、それは後世の解釈にすぎず、本来の彼は禍々しさを秘めている、として上述の自論を展開します。

また、『造物主義論』デミウルゴモルフィスム』にて、次のようにも述べるのです。

「実は順序は逆であつてこの一連の仕事(アントロポモルフィスム、テオモルフィスム)についての書籍を刊行するための準備など)をやったので、はじめてデミウルゴモルフィスムが浮かび上がった。『建築行脚』はひたすら実地でのスタディをやっていたにすぎない。建築物を読み取るための学習をしていた。ひととおりそれを終了して、やっとこんな単純な概念用語を見つけたことになった。とすればこの地点から、あらためてかつての読みとり作業を整理し形象主義(モルフィスム)でくくつてもいいだろうと思いはじめた」(カッコ内は著者補足)

ここにいう、「アントロポモルフィスム」とは人体形象主義のことであり、磯崎いわく「人体の影をあらゆる人工的な生産物のなかにさがそうとする思考」のことをいいます。

また、「テオモルフィスム」とは神像形象主義といい、いずれも磯崎の造語ですが、デミウルゴモルフィスムに考え至った経緯について「神の形象でもなく人体の形象でもない、別の格を導入するとした

磯崎新
(写真提供:共同通信社)

ネオプラトニズムによって、偉大なる建築家や芸術家のアレゴリーとして認識されるようになりました。

その頃の哲学者マルシリオ・フィチーノは「もしも道具と天の材料とを手にいれるとしたならば、人間がある程度(デミウルゴスと同じく)諸天を作ることができるといふことを誰が否定しよう」(カッコ内は著者補足)などと人間は神の力を持ちうる存在だと賛美しています。

この認識はその後受け継がれ、例えばフランス革命期の建築家クロード・ニコラ・ドゥーなどには「建築家が備える才能と想像力に神性的な性質が宿っており、建築家の創造行為が神聖を帯びる」という思想を持つに至ります。

デミウルゴモルフィスム

これは中世ヨーロッパに限ったことなく、現代日本でもデミウルゴスたらんことを公言した建築家がいきました。それは日本を代表する建築家の1人となった磯崎新です。彼はデミウルゴモルフィ

場合、両者を媒介する役割をもち、すべてのモノを造りだし、存在を存在たらしめ、しかも芸術家・建築家・技術者の代名ともなつてきたデミウルゴスをひきだすことが適切とみえたからである」などと述べています。

グノーシス主義においてのデミウルゴスは、「神の他者」であり、至高神とは似て非なる別ものとされています。そのような存在に着目し、彼自身の建築設計理念を言い表すにふさわしいメタファーこそが「デミウルゴモルフィスム」なのでしょう。

おわりに

晩年、磯崎は卒寿のあいさつ状にて「自分は芸術・建築・都市のすべてを貫通する(アーキテクチュア)を司るデミウルゴスの化身であることを欲した」というメッセージを認めたといひます。磯崎は自身の理想とする建築家像をデミウルゴスの中に求め、この世を去る直前までその化身たることを欲するほど魅入られていました。遙か古代のプラトンの造物主として創造したデミウルゴスは、建築家をはじめとする創作者たちを惹きつけてやまない何かを発し続けていたのです。

おそらく、2400年にもわたりその姿を変貌させてきたデミウルゴスは、今後も新たな進化を遂げ続け、後代の創作者たちからさらなる造物力を引き出していくことでしょう。

(文…江口知秀)
(画…上原由子)